ざいちのち 61
実践型地域研究ニューズレター no.61，2013 年 11 月

まちやむら，そこに住む人びと（＝ざいち）の，
知恵や生き方（＝ち）から学び，実践する活動です。

京都大学
生存基盤科学研究ユニット
東南アジア研究所「在地と都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究」・
「ベンガル湾縁辺における自然災害との共生を目指した在地のネットワーク型国際共同研究」

守山フィールドステーション

わら仕事（1）ワラ打ちとタワラ編み

守山 FS　藤井美穂

11 月中旬から 4 月の中旬までのコメ作りがない時期は、男性が中心になってワラ仕事を行った。

「お日さん（太陽）がさす頃から日没まで、ワラ仕事をしたな。『今日、タワラ[1]編みしよか』、『縄ぬいしよか』と遊び気分で近所の仲間に声かけた。納屋に火鉢を置いて、うまの合うもん（気の合う仲間）とワラで縄、ヒゲナシ[2]、コモ（後述する）、草鞋を作ったもんや。それぞれが自分勝手にワラ仕事をやってる。1 年間つかうものをつくるんやけど、きばりどおしではない。そういうのを『遊び気分』というのかな。ワラ仕事は家で野菜を作ったり、大津まで野菜を運んだりした合間やな」（A 氏　1926 年生）。

写真 1：タワラ編み機：守山市立埋蔵文化財センターにて撮影。

ワラ仕事には、コモ、ムシロ、ヒゲナシなどの修繕もあった。縄ぬいをするためには、ワラを柔らかくする「ワラ打ち」がある。ワラの束から 1 把か 2 把すくい、ワラを「すぐって」（ハカマをとること）ワラだけの筋になおす。3 把を一つにして石の上において槌で打った。

納屋の入り口から離れた片隅に、ワラ打ち用の四角形の石（長さ約 30 ～ 40cm、幅約 30cm）が土間に埋めてあった。石の「面（つら、表面）」だけが見えている状態で、その高さは土間からわずか 3 cm 程であった。

次にタワラ編みについて紹介したい。

タワラ編機の形状は、又状の足で横木を支えたものである。足は堤防の雑木林の木を利用した。又木になった太い木（直径約 10cm）を 2 本切り、それを材木屋で、又木になっていない方の端を 2 つに割ってもらう。この又木が底部の足となる。割った溝に横木になる木のサオ（長さ約 1.3 m）を通す。できあがったタワラ編み機は高さが約 40cm である。横木の上の部分にタワラの目（編む目）に沿って 5 カ所の目盛りとなる刻みを入れてもらう。それぞれの目盛りの溝に細縄をかける。この細縄（長さ 1.5m）の両端には長さ 10cm 程の丸太の重りが結んである。横木の目盛りに細縄を掛けて前後や交互に重りを振り分けながらワラを編み込んでいった。タワラの側面はコモから作られており、「タワラ編み」とは実際にはコモを編むことである。

長いコモは幅 1m、長さ 4m である。主にツイネの露や雨よけなどに使われ、稲を脱穀した後はほとんど使われなかった。A 氏は 5、6 枚を使っていた。ワラ仕事に手間をかけないようにするために、腐って使えなくなったコモの分だけを作った。古いものは燃やして灰にして畑の肥料にしたり、ワラをほどいて細かく切って堆肥にした。

「百姓は壊われたり、『しゃぶれる』（使えなくなる）もので、ほかす（捨てる）もんはなんも（何も）ないわけ。田と畑があるかぎりはな。捨てると自然に肥料になるさかいに」（A 氏）。

男性がワラ仕事をしている間に、女性は、野良着の「つづり」、針仕事、機織りをした。衣類のやぶれたのを繕うのを「つづり」と言う。A 氏は当時の女性の苦労について次のように語る。

写真 2：コモ

「わしらの時分はタビや靴下も若嫁が眠いのにつづった（繕った）。姑に『びやかれる（叱られる）』のが怖いので、眠たいめ（眠い思い）をして一晩中つづった。月給があったら靴下はすぐ買えたのにな。今のオジ（男性高齢者）、オバ（女性高齢者）は腰が曲がってる。オバは腰が二つ折りになってる。オバの頭より持ってはる（持っている）杖の先が上にある。昔は腰を折ってする「二つ折りの仕事」が多かったからな」（A 氏）。

在所では高齢者の女性からも協力をしていただいている。今後、在所における女性の経験や知恵について聞き書きをしていきたい。

[1] タワラはワラで編んだ袋で、コメなどの農産物や木炭の運搬や保管に用いられた。
[2] 本ニューズレター No43 に写真を掲載。

雑木林の焼畑と草地の焼畑

京都学園大学　鈴木玲治

朽木 FS では、滋賀県長浜市余呉町中河内の雑木林やススキ草地をお借りして、焼畑による山カブラの栽培を行っている。本ニューズレターでは、主に土壌養分の観点から雑木林と草地を伐開する焼畑を比較する。

一般に、焼畑による草木の焼却で生じる灰はカリウム、カルシウム、リンなどの養分を作物に供給する（灰の養分添加効果）。また、土を十分に焼くことで、植物に利用可能な無機態の窒素が土壌中の有機物から供給される（焼土効果[1]）。さらに、火入れによって埋土種子が焼却されることで、作物栽培時の雑草の繁茂が抑制される。これらの効果で、化学肥料や除草剤の投入を前提としない作物栽培が可能となることが、焼畑の大きな利点である。

一般には、これらの効果を得るには火入れに用いるバイオマス量が大きい方が有利とされる。雑木林と草地の面積当たりの地上部バイオマス量を比較した場合、よほど木本の密度が低くない限りは前者の方が大きい。余呉町の焼畑でも、雑木林を開いた焼畑の方が火入れによる効果が大きいと思われたが、中山（2014）の実験結果によれば、ススキ草地を開いた焼畑でも十分な灰の養分添加効果や焼土効果が得られており、両者の間で窒素、リン、カリウムなどの土壌養分の増加量の平均値に有意な差異は認められなかった。また、雑木林を開いた焼畑では火入れ後に灰が厚く積もった地点もあれば、ほとんど灰が残らなかった地点もあり、土壌養分の増加量の地点ごとのバラツキも大きかった。養分増加量のバラツキの少ないススキ草地の方が、カブを栽培する上では好ましいといえるだろう。

雑木林の焼畑では、伐採した木々を均等に伐開地に並べるのが難しく、焼きムラができやすい。また、太い幹や枝は燃え残るものが多く、地上部バイオマスの全てが燃焼して灰になるわけではない。一方、ススキ草地の焼畑では、刈ったススキを伐開地に均等に並べるのは容易なため焼きムラができにくく、バイオマスのほとんどは燃焼して灰になる。また、焼土効果は温度が高ければ高いほど大きくなるわけではなく、一定以上の温度に達すればそれなりの効果は得られる。このため、伐採前の雑木林とススキ草地の地上部バイオマス量の差ほどには、火入れ後の土壌養分の増加量に差がみられず、前者では土壌養分増加量のバラツキが大きくなったものと思われる。

雑木林での焼畑は、2010 年から中河内の共有林で始めたものである。これに対し、ススキ草地での焼畑は 2012 年から始めたものだが、このススキ草地は、当時の中河内の区長さんが共有林での焼畑を評して、「今年の焼畑に開いた場所はあかんで。わしは、もっとええ場所を知っとるんや。今度案内しよか。」と言って紹介された場所である。案内されたススキ草地を最初にみたときは、「本当にこんな草地が焼畑に向いているのか」と驚いたのであるが、実際に焼畑をやってみると雑木林に比べて伐採や火入れに要する労力が少なく、カブの生育状況も雑木林と遜色ないか、むしろ良好なくらいであった。火入れによる土壌養分増加量のバラツキが少なく、雑木林を開く焼畑に比べて労働生産性が高いことが、ススキ草地での焼畑が好まれる大きな要因であろう。今後は、火入れ直後の雑草の生育状況や休閑期の植生回復状況の調査も行い、ススキ草地を開く焼畑の意義をさらに検討していきたい。

写真１：雑木林の伐開

写真２：ススキ草地の伐開

参考文献
中山徳磨（2014）「滋賀県余呉町の焼畑において何故草地が好んで開かれるのか　－火入れ前後の土壌特性値の比較から－」京都学園大学卒業論文

[1] 窒素は焼畑による火入れ前の土壌にも存在するが、その大部分は植物が根から吸収できない有機態のものである。焼土効果とは、土壌温度の上昇に伴い、元々土壌中に含まれる有機物中の窒素の分解が促進されることで、作物が吸収可能なアンモニウム態窒素の量が増加する現象である。

亀岡の農業と自然（11）　すいたん農園プラン

京都学園大学　大西信弘

これまでに、ざいちのち No.37 や No.46 で紹介してきたクルベジ®農業体験塾は、保津町まちづくりビジョン推進会議が計画した「すいたん農園プラン」の一部として行われている。この計画の概要は、保津町自治会内の保津町まちづくりビジョン推進会議が、平成 22 年 2 月 13 日に発行した「かわまちづくり、『生きもの共生』で町おこし　保津川すいたん農園プラン」としてパンフレット（保津町自治会保津町まちづくりビジョン推進会議、2010）にまとめられ、地域の住民に紹介されている。以下、そのパンフレットをもとに、すいたん農園プランを紹介したい。

当初は、N さんが中心になって保津の内外から有志を集め夜のファミレスでコーヒー一杯飲みながら、地域の農業や自然をアピールして地域の活性化につなげることができないだろうかということで、平成 19 年頃に、すいたん農園プランのコアになるイメージが作られていった。具体的にどうするかということはひとまずおいておいて、この地域で何ができるのか、いろいろなアイディアを語り合っていた。この頃、私は、保全のための保全が必要なこともあるだろうけれど、日本、東南アジア、南アジアに広がる稲作地帯の自然は、農業によって維持されてきたのだから、人にとって必須である農を工夫する保全が地域の環境のためには必要なのではないかと考えていた。すいたん農園プランは、まさに地域の人たちによる農と自然を組み合わせた地域の将来設計といえよう。こうして、すいたん農園のアイディアがだんだんと形になりつつあった。このアイディアを人に伝えるために、パンフレットが作られ、イメージ図が描かれた（図 1：保津町自治会保津町まちづくりビジョン推進会議、2010）。

保津川すいたん農園プランは、いちはやく、京都府の提唱する「かわまちづくり」に対応し、次の二つのテーマを掲げている。

図 1：保津川すいたん農園プラン（2010）

テーマ1. 保津川の岸辺に「生きもの共生」の農業公園を作り、地産地消型の新たなアウトドアライフの提案、都市と農村の交流をすすめましょう。
テーマ2. そこで、「生きもの共生」（生物多様性保全型農業）を特色とした、新しいふるさと産品を育てましょう。

亀岡は古くから農業が盛んで、今なお生物の多様性に富んでおり、地域の歴史・文化・自然が「生きもの共生」という言葉に集約されている。すいたん農園プランの基本的なスタンスとして、新しいことを始めるにしても、地域の歴史・文化・自然の資源をうまく活用して、地域の物語の発展としての町づくりを目指してきた。「ざいちのち」を活かした町づくりと言ってもいいのではないだろうか。

生きもの共生の農業公園をコアとして、「水に親しむ、川辺の自然に親しむ」「地産地消・体験型の農業公園で、都市と農村の交流」することのできる「すいたん農園」を実現していこうと考えている。これは、平成 23 年からクルベジ農業体験塾として、農を通じた、人と自然、人と人の交流が始まっている。

新しいふるさと産品のコンセプトは、「自然とともに育つ作物の安心感」「国産・地場の強み：食品の原料偽装や不正表示も絶えません。国産で地場。今、これは大変な強みです。」「もうひとつの安心感、作るひとへの信頼」「安全を支える科学の力、それが説得力」である。平成 21 年から（財）中央果実生産出荷安定基金協会の助成を受けて、地域の資源である柚子や保津小麦を活用した地域産品開発がこれらのコンセプトに沿って進められている。

これらが実現することで、「地産地消」「子育て支援」「新しい町づくり」に繋がると考えている。

平成 24 年 1 月 30 日には、NPO 法人ふるさと保津を設立した。保津町まちづくりビジョン推進会議の一環として活動してきたが、NPO 法人が「これまでのまちづくりの実績と、今後においても持続可能なまちづくりをすすめるにあたって、単に保津町のみならず、他地域におけるまちづくりまでをサポートできる考え行動を伴う組織整備を目的に、特定非営利活動法人ふるさと保津を設立」し、すいたん農園プランを実現できるよう日々活動を続けている（NPO 法人ふるさと保津設立趣旨書、2011）。

参考文献
岩田明久、2006、亀岡の淡水魚？魚類相の特徴とその成り立ち？、亀岡植物誌研究会、亀岡の自然（2）：12-19
島田和彦・今村彰生・大西信弘、2013、水田棲カエル類 5 種の幼生フェノロジー、爬虫両棲類学会報、2013（2）：77-85
保津町自治会保津町まちづくりビジョン推進会議、2010、保津川すいたん農園プラン
NPO 法人ふるさと保津設立趣旨書、2011、http://homepage3.nifty.com/hozutyoujitikai/furusatohozu.html、2014.03.05

催しのご案内

■京都大学生存基盤科学研究ユニット・東南アジア研究所
京滋 FS 事業　第 61 回　実践型地域研究　定例研究会
日時　2013 年 11 月 29 日（金）　17：00 ～ 19：00
場所　京都大学東南アジア研究所　稲盛記念館２階東南亭
内容　「土地に生きる一滋賀県守山市洲本町の事例一個人史と社会史から考察する」
発表者　藤井美穂（もやい平和ネット・東南アジア研究所連携研究員）
★以上の催し物への参加ご希望の方は，ご連絡ください。
京都大学　東南アジア研究所　実践型地域研究推進室
担当：安藤和雄（ando＠cseas.kyoto-u.ac.jp）まで。

東ブータンのひととおばけ

愛媛大学大学院連合農学研究科　赤松芳郎

ブータン王国は大乗仏教を国教とするヒマラヤの麓の小国である。町では臙脂色の袈裟を身にまとった僧侶の姿や仏教の真言が書かれた大小のマニ車をよく見かける。山の峠などには仏塔が建てられ、丘や橋には真言が書かれたカラフルな旗が風にはためいている。多くの家庭には仏間が設けられ、朝は仏壇の水を替え夜はバターランプに火を灯すなど人々の生活に仏教は深く根ざしている。一方で、山や湖や地域の神も信仰され、おばけ、もののけなどの存在も広く信じられている。おばけやもののけの話は夜も更けた頃に時折議題にのぼるよい酒の肴であるとともに、村で生活する人びとの人間関係を伺い知る上で重要な視点を与えてくれる。ここではブータン東部に位置するブータン王立大学シェラブツェ校に2年間滞在したなかで聞いたおばけ・もののけ話の一端を紹介したいと思う。

東ブータンに居住するひとたちの間でドンと呼ばれる幽霊もしくは生霊は夜になると姿をあらわし時には悪意とともにあたりを徘徊する。形状は人の形であったり黒い影であったり人魂であったりと様々なようだ。学生からは大学内にある仏塔付近で夜中に影を見たり、何かの気配を感じたりしたという話をよく聞いた。クィクィクィというラップ音とともに現れる人魂ドン・ミ（ミは火の意味）は木の棒などで叩こうとすると上空に逃げていき、叩くと翌日その遊離した人魂の持ち主は体に叩かれた痛みを覚えるという。生体から遊離したドンはしばしばドン・カン

写真１：マニ車を回す学生たち

写真２：軒下に吊り下げられた男性器オブジェ

（カンは骨という意味とともにカーストもしくは父系クラン（氏族）を表す。ドン・カンは非常に悪いクランとして認識されている）や未亡人の女性、心のなかの妬みや嫉妬と関連付けて話される。民家の屋根の四隅に男性器をかたどった木製オブジェが吊り下げられているのを見かけることがあり、家の外壁などに描かれる男性器の絵とともに子孫繁栄や家内繁盛などの意味で理解されることが多いが、一方で村人からは他人の妬みや嫉妬から家を守るという側面でも説明される。ロロンは死者の肉体が生き返るゾンビのことである。現在はなかなか見ることができなくなってしまったが大学の周辺の家でも昔は入り口を低くした家屋が多かったという。これは膝を曲げて屈むことができないとされるロロンを家の中に入れないためである。東ブータンの人が言うにはロロンは良くないクランの人に多いとのことである。テブランは人や家に憑く霊のことである。学生が祖父から聞いたという話では、昔ある村の僧侶がテブランを宿していたことがあったそうだ。その僧侶は高僧の生まれ変わりとして祭り事などを執り行っていたが、あるとき村にやって来た他の高僧により高僧の生まれ変わりのふりをして背後でテブランの指示に従っていたことが看破されたという。また他の学生の話によると、彼の出身村にはテブランを有す村人がおり、その村人との間で農作物の分配や土地利権のトラブル、女性にまつわる確執などが起こると翌日に相手は重度の体調不良などに見舞われる。生前、テブランは寄主が望むものを運んできてくれるというが、死後は寄主の魂はテブランに下僕として仕えなければならないという。

村の中での助け合いは生活していく上で欠かせないものではあるが、一方で村内の閉塞性や嫉妬、恨みなどの人間関係はおばけ、もののけを通して浮き上がってくるのかもしれない。

発行：〒 606-8501 京都市左京区吉田下阿達町 46
京都大学東南アジア研究所実践型地域研究推進室
http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp/pas/
編集：安藤和雄・鈴木玲治・大西信弘・小野寺佑紀